

# 宮城県地域における古代地方行政 単位の形成過程について

Formation Process of Local Administration Units in the Miyagi Prefecture Area

古川一明

FURUKAWA Kazuaki

はじめに

- ①阿武隈川・白石川流域
- ②名取川・広瀬川・七北田川流域
- ③鳴瀬・江合・吉田川流域

まとめ

## 【論文要旨】

東北地方の宮城県地域は、古墳時代後期の前方後円墳や、横穴式石室を内部主体とする群集墳、横穴墓群が造営された日本列島北限の地域として知られている。そしてまた、同地域には7世紀後半に設置された城柵官衙遺跡が複数発見されている。宮城県仙台市郡山遺跡、同県大崎市名生館官衙遺跡、同県東松島市赤井遺跡などがそれである。本論では、7世紀後半に成立したこれら城柵官衙遺跡の基盤となった地方行政単位の形成過程を、これまでの律令国家形成期という視点ではなく、中央と地方の関係、とくに古墳時代以来の在地勢力側の視点に立ち返って小地域ごとに観察した。

当時の地方支配方式は評里制にもとづく領域的支配とは本質的に異なり、とくに城柵官衙が設置された境界領域においては古墳時代以来の国造制・部民制・屯倉制等の人身支配方式の集団関係が色濃く残されていると考えられた。それが具体的な形として現われたものが7世紀後半代を中心に宮城県地域に爆発的に造営された群集墳・横穴墓群であったと考えられる。

宮城県地域での前方後円墳や、群集墳、横穴墓群の分布状況を検討すると、城柵官衙の成立段階では、中央政権側が在地勢力の希薄な地域を選定し、屯倉設置地域から移民を送り込むことで、部民制・屯倉制的な集団関係を辺境地域に導入した状況が読み取れる。そしてこうした、城柵官衙を核とし、周辺地域の在地勢力を巻き込む形で地方行政単位の評里制が整備されていったと考えた。

【キーワード】 群集墳、横穴墓群、城柵官衙、地方行政単位、国造制、部民制、屯倉制

## はじめに

東北地方に分布する城柵官衙は、7～9 世紀の中央政権が東北地方をその支配領域に組み込んでいく過程で、境界領域の政治的・軍事的拠点として設置された施設である。7 世紀代の柵としては、『日本書紀』大化三（647）年に沼垂柵、大化四（648）年に磐舟柵、白雉五（654）年に都岐沙羅柵が設置されている。沼垂柵は新潟県新潟市に、磐舟柵は同県村上市に所在したことが知られる〔小林 2005〕が、いずれも具体的な遺跡の特定にまではいたっていない。都岐沙羅柵は設置された地域も明確でない。また、『日本書紀』持統三（689）年陸奥国優嗜曇郡柵養蝦夷の記事から、山形県置賜郡、現在の米沢市周辺に名称不詳の柵が設置されたことが知られるが、これについても遺跡は確認されていない。

一方、『日本書紀』等の文献に記載はないものの 7 世紀後半代に設置された城柵官衙遺跡が太平洋側では複数発見されている。宮城県仙台市郡山遺跡、同県大崎市名生館官衙遺跡、同県東松島市赤井遺跡などである。本論では、7 世紀後半の城柵官衙成立の基盤となった地方行政単位の形成過程を、古墳・横穴墓群の分布状況を中心とした考古学的な調査成果から検討してみたい。宮城県地域の城柵官衙成立期の様相については、土器や住居跡・墳墓などの考古資料の比較検討が進められ、当該地域の在地勢力と畿内・関東地方との間に多彩な交流があったことが明らかにされている〔佐藤 2006, 高橋 2009〕。また、こうした交流が生まれた背景については、中央政権主導による移民策が進められたためと考えられている。さらに、これら移民集団の人身支配を基礎として初期官衙や囲郭集落が設置され、郡・評の領域支配の基盤となる地方行政単位が形成されることで律令国家の版図は着実に南から北に向かって拡大していったとみられている〔今泉 2005, 岡田 2006, 阿部 2007, 熊谷 2009, 村田 2009 ほか〕。

しかし、古墳時代以来の在地勢力と中央政権との具体的な関係については、必ずしも議論が深められていない。広瀬和雄氏はこの課題を「前方後円墳国家と律令国家の「国境」という端的な言葉で表現し「律令国家に収斂される古代史、一方向に発展していくといった既往の通説、それに規制された歴史認識では、二つの異質な文化がいかなる関係性をもって展開したのか、との問いは提起されにくい。」〔広瀬 2009〕と指摘している。これまでの城柵官衙成立に対する通説的な理解においては、律令国家形成期という視点から、移民や官衙造営への中央政権の関与が強調され、関東以北の在地勢力の存在・介在は過小評価されるという中央偏重の傾向があったことは否めない。7 世紀における中央と地方の関係を、律令制国家の確立された 8 世紀から振り返るのではなく、6 世紀の地方分権的な視点に立ち返って観察する必要がある。城柵官衙の成立過程において、これまでは強力な中央政権の主導性が強調され、地方が果たした役割については移民や物資の補給基地としての補助的な立場が強調されてきた。しかし、7 世紀代の、既成の支配権が脆弱な宮城県北半の地に中央政権が進出する前提として、関東以西の国造制、部民制、屯倉制のもとで組織化された人間集団による先駆的な活動の実態を再評価する必要がある。

本論の課題は、古墳時代後期に宮城県地域において前方後円墳、群集墳、横穴墓群を造営した氏族集団が、7 世紀後半の城柵官衙の成立にどのように関わっていたのか、そしてその中でとくに在

地勢力の存在をいかに評価できるか、という点にある。小論は、そうした課題解明の糸口として、7世紀代の古墳・横穴墓、城柵官衙遺跡の位置関係から地方行政単位の形成過程を検討してみたい。

7世紀後半代の宮城県地域における城柵官衙の成立や地方行政単位の形成過程における在地勢力の存在を評価するためには、複雑な地域社会の動向を地域単位で把握し、積み重ねていく作業が必要になる。ここではやや冗長になるが、その基礎的な作業として具体的な考古・文献資料を地域単位で総合的に整理し検討することにした。その際の地域単位の区分としては、7世紀代の古墳や横穴墓の分布をもとに、宮城県地域を①県南部の阿武隈川・白石川流域、②県中央部の名取川・広瀬川・七北田川流域、③県北部の鳴瀬川・江合川流域、の三つの地域〔古川1996〕に区分する。これらの地域はさらに、城柵官衙との関係から、それぞれいくつかの小地域に細分される。この小地域は、おおむね奈良・平安時代の郡を単位とする領域に重なるので、以下では小地域を便宜的に『和名類聚抄』記載の郡名で示すことにする（図1）。そして、これら考古資料から想定される小地域単位の中央政権と在地勢力の動向を、奈良時代後半賜姓・改姓記事などから、各地に墳墓を造営した氏族もしくは単位集団の出自・系譜・性格についても考察してみたい。奈良時代後半の賜姓・改姓記事から7世紀の氏族の出自を推察することには飛躍があるが、考古学的資料の検討を交えることで補いたい。

## ①……………阿武隈川・白石川流域

この流域は、古代の伊久・荊田・柴田・日理の各郡が置かれた地域である（図2）。この地域では、6世紀後半に造営されたとみられる前方後円墳が確認されていることから、関東地方や東北地方南部福島県域と同様、在地有力氏族の支配権が存在した地域とみられる。ただし、豪族居館や氏寺とみられる遺跡が確認された例がない点で、関東地方や東北地方南部の福島県域とはやや様相を異にしている。以下、具体的な状況を古代の伊久・荊田・柴田・日理の郡域ごとにみえる。

**伊久：**伊久は、現在の伊具盆地の丸森町・角田市域にあたる。この地域の古墳分布は阿武隈川東岸側（隈東地区）と阿武隈川西岸側（隈西地区）に分かれ、4・5世紀には隈西地区に有力古墳が分布するが、6・7世紀には隈東地区の伊具盆地南東部に古墳群や横穴墓群が濃密に分布し、丸森町台町・上片山古墳群、新町・四反田古墳、角田市大久保古墳群など横穴式石室を内部主体とする古墳や、丸森町篠崎・羽山横穴墓群などが造営されている。

この中には宮城県地域では最終末の前方後円墳とみられる台町20号墳が含まれる。台町20号墳は長軸約27mで、主体部は横穴式石室であったと推定され、6世紀後半、前方後円墳編年10期前半＝陶邑須恵器編年TK43型式期、の造営年代が想定されている〔藤沢2001〕。また、この地域の最終末の有力氏族の墳墓とみられる大久保古墳群は、巨石使用の横穴式石室（図6-1）を内部主体とする円墳で、石室構造や墳形から6世紀後半から7世紀代の造営年代が想定されている〔角田市教育委員会1997〕。また、伊具郡衙と推定される角田郡山遺跡では、大溝により区画された正倉地区とみられる一画が確認されていて、出土遺物から7世紀後半まで遡る可能性がある。

以上のように、主な横穴式石室墳や横穴墓群はいずれも隈東地区の伊具盆地南東部に偏在してい

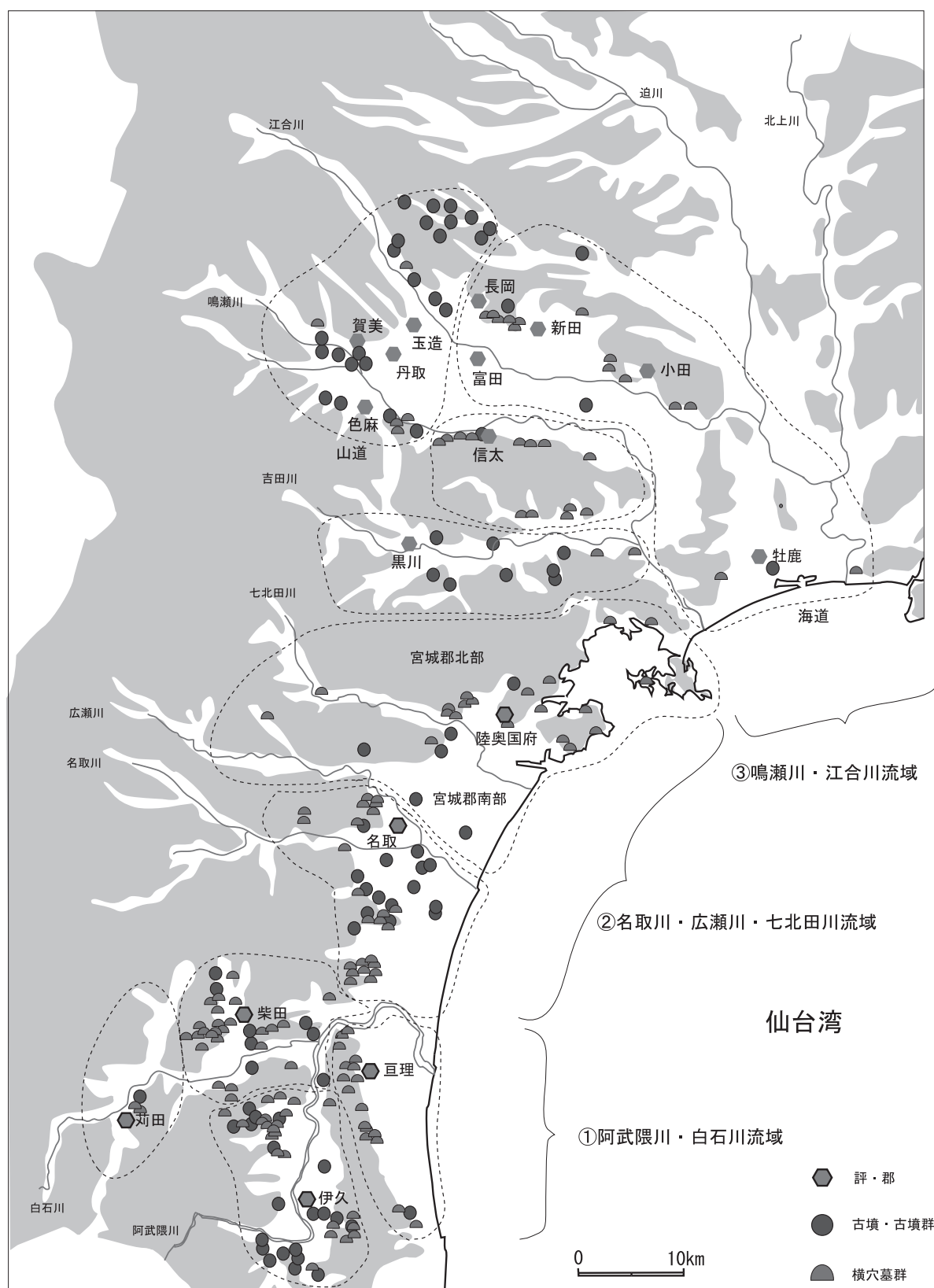


図1 宮城県南・中央部地域7世紀の古墳・横穴墓の分布と古代の郡域

る。また、同地域で6世紀後半の前方後円墳から7世紀前半の円墳への有力古墳の変遷を辿ることができ、さらに、伊具郡家と推定される角田郡山遺跡も同地に所在する。これらのことから、伊具盆地南東部は『先代旧事本紀』所収「国造本紀」に宮城県地域の確実な国造として唯一記載された伊久国造の本拠地であったと推定され、その支配領域が後の伊久郡の領域の基盤となったと考えられる。

なお、横穴墓群の中には、床面が礫敷きで南武蔵との交流を示す玄室形態をもつ篠崎1号墓のような横穴墓も確認されている[古川1996 264頁]。また、角田郡山遺跡に隣接する品濃遺跡では同時期の竪穴住居跡群が確認され、羽釜とみられる破片[角田市教育委員会2008]が出土している。羽釜とみられる土器は7世紀末と全国的に見ても例外的に古い資料であり渡来系氏族との関わりで注目される。これらの要素は、新たな地方支配方式の導入にあたって、実務レベルでは他地域との交流が活発に行われたことを示す資料とみることができる。

**荊田：**荊田郡は、養老五（721）年に柴田郡から2郷を割いて新たに創出された郡である（図2）。両郡域は本来、白石川中流域の一連の地域であったものが、荊田・柴田郡域に分離したとみられる[芳賀2004]。

荊田は、現在の白石市域から蔵王町南半部にかけての地域にあたる地域とみられる。このうち、

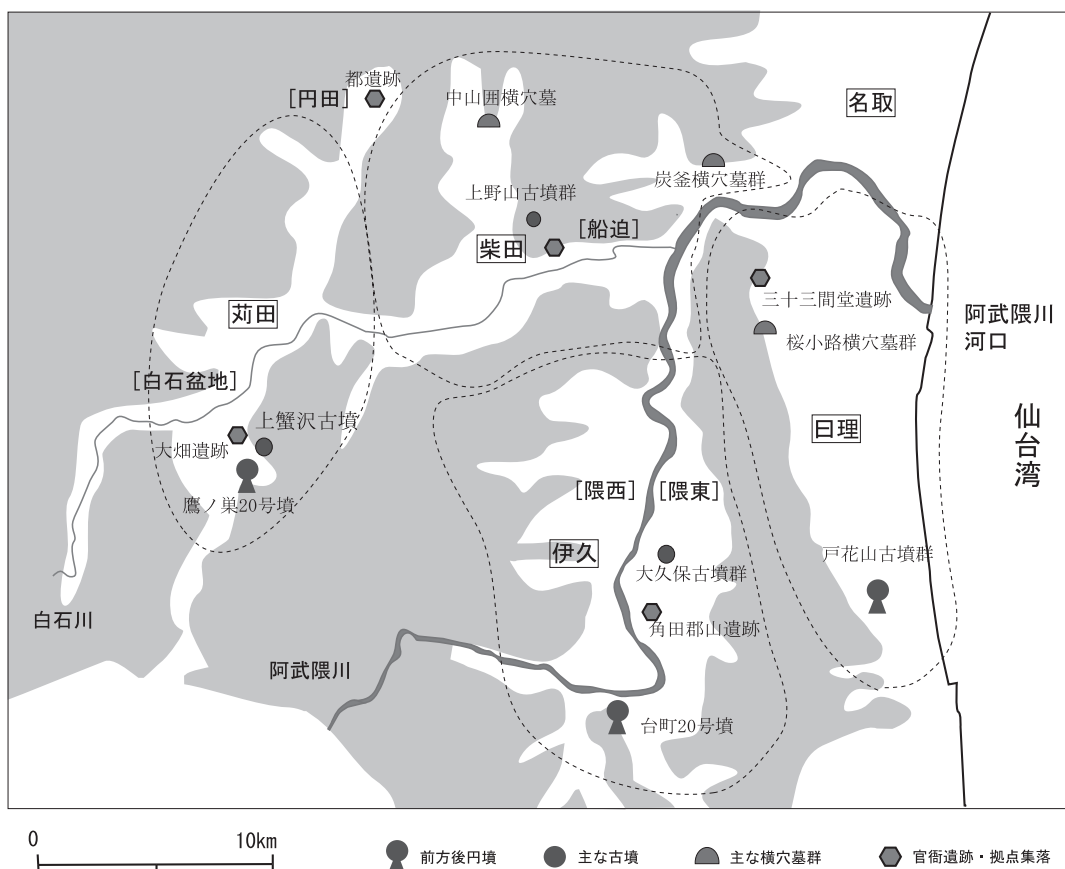


図2 阿武隈川下流域の小地域と主な遺跡の分布



白石盆地南東部には 6 世紀後半、前方後円墳編年 9・10 期 = 陶器須恵器編年 TK10~43 型式期、の  
前方後円墳とされる白石市鷹巣 17 号墳〔岩見 2001, 藤沢 2001〕を含む鷹巣古墳群 (図 6-2)〔白石市  
教育委員会 2012〕が所在する。また同地域には 7 世紀前半代の有力古墳とみられる白石市上蟹沢古  
墳や郡山横穴墓群なども造営されている。上蟹沢古墳は報告書が未刊行のため詳細は不明であるが、  
切石積複室構造の横穴式石室を内部主体とする方墳で、馬具・装飾付大刀が出土している。さらに  
同地域には後の荏田郡衛正倉跡と推定される白石市大畑遺跡〔宮城県教育委員会 1995〕や、八幡坂・  
元山窯跡など 7 世紀末頃まで遡る須恵器・瓦窯跡も所在する。このように、一地域内で、6・7 世紀  
代の有力古墳の変遷を辿ることができ、その後の郡衛とみられる遺跡も立地する状況からみて、こ  
の地域には先にみた伊久とほぼ同等の在地有力氏族が存在し、その支配領域が後の郡域の基盤と  
なった可能性が高いと考えられる。すなわち、この地域においては、『国造本紀』に記載はないもの  
の荏田国造とでも称すべき在地有力氏族の存在を想定することが可能であり、その根拠地は白石盆  
地南東部であったとみることができる。

これに対し、白石盆地南東部からおおよそ 10 km 北に位置する蔵王町円田地区にも、7 世紀末~8  
世紀の土器・瓦類が出土し、荏田郡域の官衙もしくは寺院と推定される蔵王町都遺跡が存在したこ  
とが知られている〔蔵王町教育委員会 2005〕。残念ながら、都遺跡の主要部は未調査のまま湮滅して  
しまったため詳しい内容を知る術はないが、近年の圃場整備事業に関わる一連の調査の結果、この  
都遺跡をはじめ、円田地区北部に位置する蔵王町十郎田遺跡、六角遺跡から、いずれも少量ながら  
関東系土器が出土することが確認され、さらに、これらの遺跡がいずれも溝と柵によって構成され  
る区画施設を有するいわゆる 7~8 世紀の「囲郭集落」〔村田 2009〕であることが明らかになってき  
た〔鈴木 2010〕。これにより、城柵の設置されなかった陸奥南部の円田地区においても 7 世紀後半段  
階以降、移民集落が形成されたことが確認されたことになる。では、何故、この地にこのような移  
民集落が出現したのであろうか。その背景にはまず、円田地区が盆地状の孤立的な地形で、旧在地  
勢力の拠点とみられる白石盆地南東部から隔てられた地域にあるという地理的要因が存在したと推  
察される。また、円田地区には 6 世紀後半以降の有力古墳や横穴墓は確認されておらず、この地区  
が 7 世紀前半代の在地勢力の存在感が薄い地域であったともみられる。7 世紀後半の円田地区に移  
民集落が出現したのは、白石川流域に進出をもくろむ外部勢力が、移民集落もしくは官衙的施設 =  
都遺跡の設置にあたって、在地勢力の根拠地から離れ、その影響力が希薄な円田地区を選定した結  
果ではないだろうか。円田地区におけるこの種の集落の形成要因は「対蝦夷政策」ではなく、「対在  
地勢力」という異なる対立軸の中に位置付けられることで、その歴史的意義が理解し易くなるもの  
と考えられる。

このようにみえてくると、荏田郡域の白石盆地南東部では 6 世紀末から 7 世紀代にかけて、在地有  
力氏族が存続し、その支配領域が後の荏田郡域の基盤となったと考えられる。ただし、郡域北部の  
円田地区には何らかの外部勢力により移民が送り込まれ、在地勢力をけん制する立場となり「囲郭  
集落」が形成されたと考えられる。

ところで、さきにも触れたように荏田郡は、文献上では養老五 (721) 年に柴田郡から 2 郷を割い  
て新たに創出された郡として認識されている。しかし、後にみるように郡域分割の母体となった柴  
田郡域では上記の円田地区と同様、有力古墳は確認されておらず、6・7 世紀の有力古墳 = 在地有力

氏族という視点からすれば、在地勢力は分出した荊田郡域のほうが母胎である柴田郡域より優勢であったとみられる。このような逆転現象は何故生じたのであろうか。これも、外部勢力の一つである中央政権側が、在地勢力が温存された荊田領域ではなく、在地勢力の影響力の薄い柴田領域に郡（評）の拠点となる施設を設置した結果とみることができる。すなわち、本来一連の地域として認識されていた白石川中流域のうち、柴田郡域に中央政権が主導する施設が設置され、在地勢力主導の荊田郡域が包摂される形で柴田郡（評）が設置されたが、養老五年に何らかの事情で荊田郡域を分離・分出させる形をとったと考えることができる。

**柴田：**柴田は、現在の柴田町、大河原町、村田町域にあたる（図2）。この地域では6～7世紀代の有力古墳は確認されていないが、柴田町から村田町にかけて分布する古墳総数150基以上の上野山古墳群〔宮城県教育委員会1981〕をはじめ同町炭釜・森合横穴墓群、大河原町上谷・土合横穴墓群、村田町中山囲・龍泉院横穴墓群など多くの横穴墓が6世紀末から7世紀前半以降に造営されている。このうち村田町中山囲3号横穴墓から圭頭大刀〔藤沢、菊地2002〕、炭釜横穴墓B群8号横穴からは銅釧が出土している。柴田郡衙に関わる遺跡は未確認であるが、7～8世紀代の大規模な群集墳である上野山・寺後古墳群（図6-3）〔柴田町教育委員会1976〕や兎田窯跡が分布する郡域東部の柴田町船迫地区に7世紀代に遡る柴田郡衙が所在した可能性が指摘されている〔芳賀1989〕。

柴田郡は養老五年に荊田郡を分出していることから、領域的には、荊田と一連の地域であったとみられる。そして、6～7世紀代の有力古墳が確認できない柴田郡域は荊田郡域の鷹巣17号墳や上蟹沢古墳などの在地勢力とみられる被葬者の支配下に属する地域であったと考えられる。ところが、すでに荊田郡の項でみたように、前代の古墳の内容では有力古墳を有する荊田郡が、群集墳しかみられない柴田郡から分割されるという形をとっている。繰り返しになるが、こうした一見逆転現象のようにみえる記事も、在地勢力側の視点から見れば、中央政権側が在地勢力の拠点とみられる荊田領域ではなく、在地勢力の影響が希薄な柴田領域に評（郡）の拠点を設置した結果、とみることができる。横穴墓から出土した副葬品の内容をみると、柴田郡域に属す中山囲・炭釜横穴墓群などが、圭頭大刀・釧などの威信財を保有しており、横穴墓の被葬者と中央政権との近さを示唆している。

**日理：**日理は現在の亘理町・山元町域にあたる（図2）。この地域の6・7世紀の有力古墳をみると、郡域南部の山元町戸花山古墳群中に長軸十数メートルの小型前方後円墳が確認されている。この古墳は未調査であるが、前方部と後円部の高さがほぼ等しく前方部が発達した墳形の特徴から、前方後円墳編年9期＝陶邑須恵器編年TK10型式期以降（6世紀後半）とする見方〔岩見2001〕がある。このような戸花山古墳群の位置する郡域南部には在地有力氏族の支配権が存在した可能性が想定される。ただし、この地域に横穴式石室を主体部とする有力古墳は確認されておらず、官衙の存在も確認されていない。

これに対し、郡域北部の阿武隈川河口付近では、7世紀後半代に入り、亘理町井戸沢・桜小路・雁田・堤の内・袖ヶ沢・田沢など多くの横穴墓群が造営されている。このうち、桜小路26号墓からは方頭大刀〔亘理町教育委員会1981、菊地1993〕が出土し、6号墓の形態には畿内との交流を示す要素〔古川1996 264頁〕も認められる。また、亘理町堀の内遺跡では畿内系土器〔亘理町教育委員会1997〕が出土している（図8-3）。日理郡内で、奈良時代以前の官衙的施設は未だ発見されていないが、平

安時代の日理郡衙跡とみられる亙理町三十三間堂遺跡は郡域北部に位置し、その東方平野部に郡（こおり）の地名が残る。

これらのことから、小型前方後円墳が確認されている郡域南部では 6 世紀後半代には在地有力氏族による地域支配が存在した可能性<sup>(2)</sup>がある。一方、阿武隈川河口に近い郡域北部では、7 世紀後半代に活発な横穴墓群の造営が確認でき、その後、郡衙はこの地域に設置されたとみられる。このような状況は、柴田郡域と同じように、日理郡衙の設置にあたって、中央政権側が、在地勢力の影響力が残る郡域南部ではなく、在地勢力の影響力の及びにくい郡域北部を選定した結果とみることができる。日理においては、特に畿内との交流を示す要素がみられることから中央政権中枢の有力氏族との深い関係を通して、郡域北部の阿武隈川河口周辺を拠点とした直轄領域の経営に乗り出した可能性が想定〔井上 1999〕される。その主な目的は阿武隈川河口部を抑え、太平洋沿岸の水上・海上交通〔平川 2004, 荒木 2011〕を掌握することにあつたと考えられる。このように、日理郡域では 6 世紀末に郡域南部を拠点とした国造クラスの在地勢力が存在したとみられるが、郡域北部に中央政権直轄の領域が設置され、これが後の日理郡の基盤となったと考えられる。

## ②……………名取川・広瀬川・七北田川流域

これらの流域は、古代の名取・宮城郡が置かれた地域である（図 3）。この地域では 6 世紀後半以降の前方後円墳の存在は名取市賽ノ窪 17 号墳を除き不明確であるが、7 世紀前半代の有力円墳は小地域ごとに確認できる。また、横穴墓の造営は 6 世紀末以降に開始されたとみられる。通説によれば、この地域は国造制が施行されなかった地域として先に見た阿武隈川流域の地域と区分されそれが城柵官衙設置の前提条件として認識されている〔今泉 2005 ほか〕。しかし、7 世紀前半代の有力古墳や横穴墓群の造営を評価するならば、名取・宮城の両郡域は少なくとも 7 世紀前半代までは先にみた阿武隈・白石川流域を凌ぐような在地有力氏族が存在した地域と捉えるべきであろう。仙台市郡山遺跡はそうした在地勢力の領域の中に割って入るように、両郡域の境界地域に設置された施設とみることができる。以下では具体的な状況を名取・宮城郡内をさらに小地域に分けることで、詳しくみてみたい。

**名取：**名取は、現在の岩沼市、名取市から仙台市太白区・若林区南部にかけての地域にあたる。仙台市域を東流する広瀬川以南から阿武隈川河口にかけての地と推定される。この地域の有力古墳として、郡域中央の名取市愛島地区に全長 32 m の前方後円墳、賽ノ窪 17 号墳（十石上古墳）が確認されている。賽ノ窪 17 号墳（十石上古墳）は未調査であるが、墳形の特徴から 6 世紀後半、前方後円墳編年 9・10 期＝陶器須恵器編年 TK10～43 型式期とする見方〔岩見 2001〕がある。さらに同地域には 7 世紀前半の有力古墳として巨石使用の横穴式石室を主体部とした山岡古墳が確認されていて、山岡古墳からは頭椎大刀が出土している。また、6 世紀末～7 世紀代には名取市熊野堂横穴墓群、岩沼市長谷寺、二木、引込横穴墓群が造営されていて、熊野堂 A28 号墓から圭頭大刀、二木横穴墓群からも頭椎大刀が出土している。名取市愛島地区周辺は、雷神山古墳、名取大塚山古墳など、古墳時代前期以降一貫して東北地方最大規模の前方後円墳が造営された地域である。これらに比べると、賽ノ窪 17 号墳や山岡古墳を有力古墳と呼ぶにはやや見劣りのする印象が否めない。しかし、



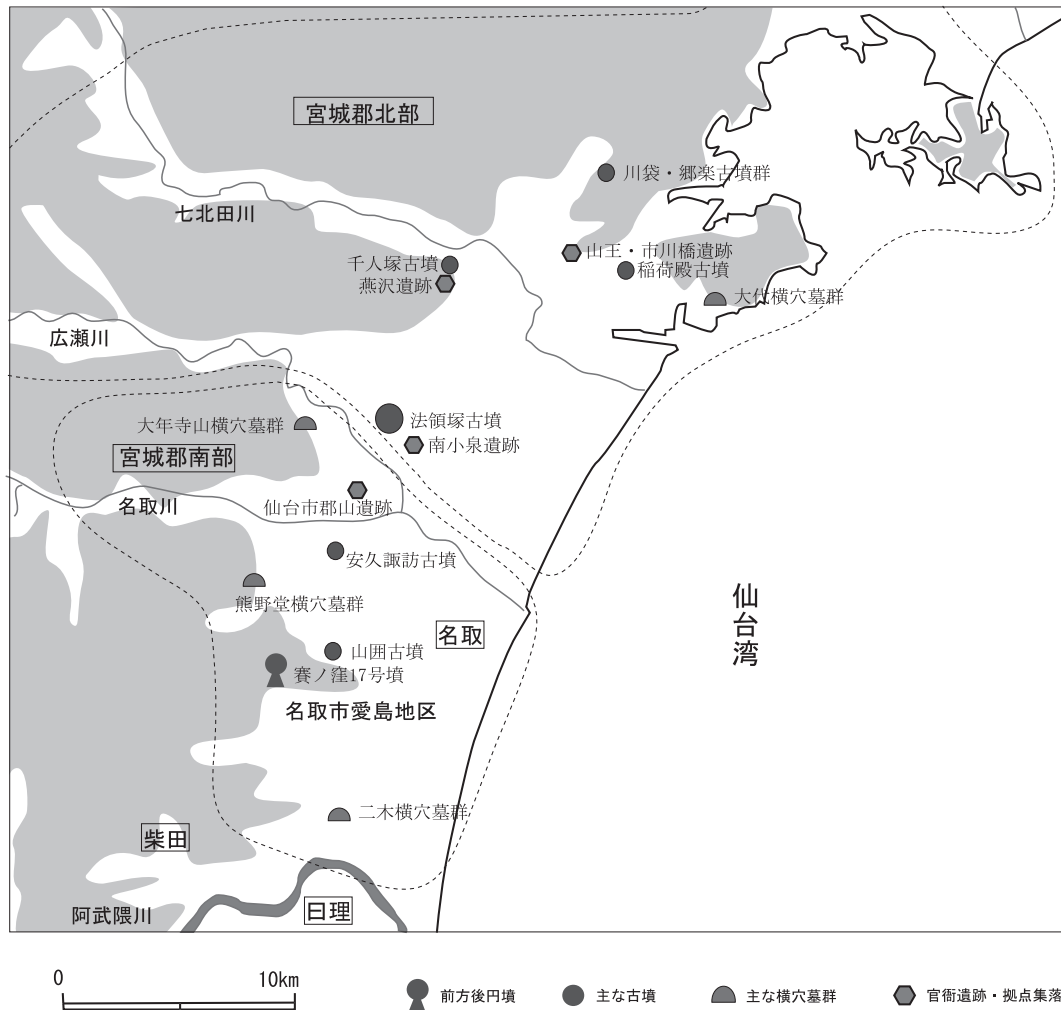


図3 名取・広瀬・七北田川流域の小地域と主な遺跡の分布

在地勢力は矮小化しながらも6世紀後半の賽ノ窪17号墳、7世紀前半の山岡古墳へと継承されたとみることができよう。こうした古墳・横穴墓群の分布状況は、同地域に6世紀代から7世紀前半の在地有力氏族による地域支配が存続した可能性を示している。現段階で名取郡衙の明確な比定地は不明であるが、賽ノ窪17号墳や山岡古墳の被葬者に代表される在地勢力の支配領域が後の名取郡の直接の基盤となったと考えられる。

一方、仙台市郡山遺跡Ⅰ期官衙を城柵とする見解〔今泉2005、進藤2010〕がある。仙台市郡山遺跡は仙台市太白区長町地区に所在する。名取郡域の北端もしくは、次にみる宮城郡域の南端に位置し、名取郡域の在地勢力の拠点とみられる名取市愛島地区からは大きく離れている。この地は、古墳時代前期以降の有力な前方後円墳や古墳群が継続的に造営された地域である。特に埴輪を有する古墳が5～6世紀代に継続的に造営された点で東北地方でも在地勢力が優勢な地域といえる。ところが、6世紀後半から7世紀前半代の前方後円墳や有力古墳は確認されておらず、高塚古墳としてはほかに中規模の河原石積横穴式石室を内部主体とする安久諏訪古墳があるにすぎない。

一方、長町地区の北方に位置する大年寺山周辺には大年寺山、愛宕山・土手内・茂ヶ崎・宗禅寺などの向山横穴墓群と総称される大規模な横穴墓群が分布し、7 世紀代の須恵器窯である土手内窯跡も確認されている。この地域での横穴墓群造営は 6 世紀末～7 世紀代に開始され、大年寺山横穴墓群 10 号墓からは圭頭大刀・馬具、同 6 号墓からは釧、18 号墓からは銅碗などの威信財も出土している。これら大年寺山周辺の 7 世紀代の遺跡は、仙台市郡山遺跡に深く関わる遺跡群とみられている[長島 2011]。同じく仙台市郡山遺跡の成立に深く関わる遺跡群とされる長町駅東遺跡では在地の土器に加え、関東系の土器を有する住居跡群が発見され、大規模な関東地方との交流があったとみられている。また向山横穴墓群中の愛宕山 C-1 号装飾横穴[仙台市教育委員会 1985]は、横穴の形態や装飾文様の構成などから福島県浜通り地方との交流がうかがえる。

このように、仙台市郡山遺跡の官衙施設造営は在地勢力とは不連続であり、他地域からの移民がより深く関わっているとみられる。ただし、この時点で、これら関東・南東北地方からの移民を柵戸と呼ぶことはできない。仙台市郡山遺跡 I 期官衙については屯倉などの人身的支配の拠点における中核施設としての性格を想定すべきであろう。仙台市郡山遺跡の立地をみると、次に見る宮城郡南部の法領塚古墳が造営された地域と名取市山岡古墳が造営された名取市愛島地域との領域の境をなす名取・広瀬川の合流点に位置している。この立地では、水陸交通の要衝という地理的条件は確保できるものの、水害による影響を受けやすいという条件をも負うこととなる。このような立地をあえて選択した背景には、水陸交通の要衝という自然地理学的要因だけでなく、在地勢力支配領域の間隙を選択するという条件も加味されていたと考えられる。

**宮城：**宮城郡は後に国府が置かれ陸奥国の中核となる地域である。宮城郡域の 6～7 世紀代の古墳・横穴墓や主な集落分布は、さらに名取・広瀬川流域を中核とした南部と、七北田川流域を中核とした北部の大きく 2 地域に分けることができる。

まず、宮城郡南部は、名取・広瀬川流域で、現在の仙台市若林区に相当する地域で、後に国分僧尼寺が造営されるなど宮城郡の中核的な地域とみられる。この地域は、墳丘規模が直径 55 m と 7 世紀前半代の東北地方では墳丘規模が最大とみられる仙台市法領塚古墳[仙台市教育委員会 2011]が造営された地域である。法領塚古墳の横穴式石室の構造は、常陸多珂国造もしくは道奥菊田国造の領域であった茨城県北部から福島県南部の太平洋沿岸地域に多くの類例が求められる(図 7)ことから、両地域間の有力氏族間で古墳築造に関して緊密な技術的交流があったと考えられる。また、この地域の中核的遺跡である南小泉遺跡でも関東系土器を有する住居跡群が発見されている。法領塚古墳が造営された背景には、古墳時代前期の遠見塚古墳に代表される在地勢力に加え他地域、とくに常陸多珂国造もしくは道奥菊田国造との交流が深く関わっているとみることができる。このように首長層が新しい墳墓形式を採用し共有することで、他の首長層との差別化をはかるという状況は、7 世紀中頃の武蔵国において指摘されている。広瀬和雄氏は、その背景に「首長層の移住」を想定している。さらに、こうした動きは武蔵国府成立の前提となるもので、中央政権による首長間の利害関係の調整が進められたともみている[広瀬 2012]。このような事例からみると、法領塚古墳の横穴式石室の構造が常陸多珂国造・道奥菊田国造と共有される状況は、これまで想定されていた柵戸の移住といったレベルではなく、7 世紀代前半の陸奥国内で有力氏族の移住がおこなわれた可能性をも想定すべきであろう。

宮城郡北部は、現在の仙台市宮城野区・泉区から多賀城市、利府町、七ヶ浜町、塩釜市、松島町にかけての地域にあたるとみられる。この地域には6・7世紀前半代の中規模有力古墳として、多賀城市稲荷殿古墳、利府町川袋・郷楽古墳群(図6-4・5)などがある<sup>(3)</sup>。これらの古墳の横穴式石室の構造は、栃木県に類例がみとめられることから、法領塚古墳と同様に北関東の有力氏族との間に古墳築造に関して技術的交流があったと考えられる[古川1996 268頁]。横穴墓の造営も6世紀末～7世紀前半には開始されたとみられ、仙台市宮城野区入雨沢・台屋敷横穴墓群、多賀城市大代横穴墓群、砂山・枅形囲・田屋場横穴墓群、利府町道安寺横穴墓群など多くの横穴墓群が分布している。このうち多賀城市大代横穴墓群6号墓から頭椎大刀とみられる刀装具類が出土している。

また、この地域の中核的な遺跡である多賀城市山王・市川橋遺跡に隣接する多賀城市高崎遺跡から双竜環頭柄頭破片(図8-1)[多賀城市教育委員会2008]が出土している。頭椎大刀の生産と配布には中央政権中枢の物部氏が、双竜環頭柄頭は蘇我氏が、それぞれ深く関わっているとされ[清水1983, 菊地2010 106頁]、これらの出土例は福島・宮城の太平洋沿岸地域に点々と分布している。

さらに、多賀城市山王・市川橋遺跡では、山王遺跡伏石地区SA3158材木列とSD3014大溝による区画施設が7世紀後半に遡る遺構である可能性が指摘されている[宮城県教育委員会2001a 252頁]。また、山王遺跡伏石地区に隣接する多賀城跡五万崎地区の丘陵地を対象とした83次調査でもこれら区画施設と同じ真北から30度前後振れた軸方向をとる建物跡や住居跡群が発見されている[宮城県多賀城跡調査研究所2011]。こうした7世紀後半代の基準線方位が30度前後傾く材木堀と溝により構成される区画施設を巡らす遺構群のあり方は、仙台市郡山遺跡Ⅰ期や名生館官衙遺跡Ⅰ期、赤井遺跡Ⅰ期の様相にきわめて類似している。山王遺跡SA3158材木列とSD3014大溝による区画施設は、大平氏が指摘[大平2010 87頁]したように「初現期の柵」[熊谷2004 59頁]に関わる施設としてより重視されるべきであろう。

現段階で、山王・市川橋遺跡の区画施設周辺の遺構の実態は未だ不明確ではあるが、これらの遺構の性格を検討する上で注目すべき7世紀後半～8世紀初頭の遺物がいくつか確認されている。まず、多賀城跡五万崎地区では「舎人」のヘラ描き文字のある8世紀初頭とみられる須恵器高台杯が出土している[宮城県多賀城跡調査研究所1994 90頁]。また、隣接する市川橋遺跡奈良時代河川跡SD5021からは「柴田」・「名取」など刻字のある内外面黒色処理・非ロクロ成形の土師器鉢が出土している(図8-7～9)[宮城県教育委員会2001a 218頁]。これらはいずれも7世紀末～8世紀初頭の多賀城創建を前後する時期の土器とみられる。「舎人」のヘラ描きのある須恵器は、東松島市赤井遺跡でも出土しているが、当遺跡で同様の「舎人」のヘラ描きのある須恵器が出土したことは、中央とのつながりを有する在地有力者の存在を示す資料として注目される。また、「名取」の刻字のある土師器は郡山遺跡Ⅰ期官衙SK46から出土しており(図8-5)、この段階ですでに名取評が成立していたことを示す資料と考えられている[今泉2005 309頁]。山王・市川橋遺跡では「名取」・「柴田」など、多賀城創建前に成立した評名とみられる刻書土器が出土しているので、遅くとも7世紀末～8世紀初頭の段階ですでに複数の評(郡)に関わる物資がこの地に集積される状況が成立していたとみることができる。

あらためて山王・市川橋遺跡にみられる出土資料をみると、5世紀後半代には鉄器生産関連遺物・韓式系土器・鹿角製刀子柄、6世紀後半～7世紀代には祭祀具・骨鏃に加えて、双竜環頭柄頭

破片〔多賀城市教育委員会 2007 26 頁〕などの重要な遺物が出土している。これらに類似した内容の遺物が出土した遺跡として、愛知県法海寺・松崎遺跡や和歌山県西庄遺跡など、太平洋沿岸に立地する 6～7 世紀の拠点集落とされる遺跡に類例が見出せる。法海寺・松崎遺跡は、屯倉制・部民制を基礎とする領域・人身的支配の前提として、政治的意志に沿って成立した計画村落として評価されており、とくに装飾付太刀（双龍環頭把頭の貴金具）の存在から、6 世紀後半～7 世紀前半の蘇我氏に関わる屯倉設置と関係する可能性が指摘されている〔早野 2005〕。西庄遺跡も、韓式系土器が集中出土することから渡来系集団の配置も含む計画村落であったとみられ、製塩、海産物の生産・生産用具（鹿角製刀子柄・骨鏃など）の制作、軍事物資など多角的な生産活動がうかがえることから海部屯倉（欽明 17 年 = 556 年）に関係した遺跡と考えられている〔森・白石 1968〕。

ところで、山王・市川橋遺跡は沖積地に立地しているが、多賀城跡や高崎遺跡などの遺跡が立地する北東丘陵地から東南方約 4 km の大代地区にかけての丘陵一帯にも横穴墓・窯跡などの 6～7 世紀代の遺構や遺物が確認されている。多賀城跡外郭南門下で発見された田屋場横穴群〔高野 1991〕、高崎遺跡第 56 次調査で発見された 6 世紀末～7 世紀初頭の須恵器窯跡〔多賀城市教育委員会 2007〕、大代地区周辺の横穴墓群〔多賀城市教育委員会 1985〕などである。これらの遺跡を含め、山王・市川橋遺跡を中核・拠点とした領域の範囲は、より広域に及ぶものとして捉え直す必要がある。この領域の古代における地理的立地をみると、現在、遺跡の南方約 5 km を東流している七北田川が中世以前は大代地区南方の湊浜地区周辺で海にそそぎ、山王・市川橋遺跡を中核とした遺跡群は河口奥に存在した潟湖の北岸側に立地していたと推定される〔松本・野中 2006〕。山王・市川橋遺跡からみると湊浜地区は地名の示す通りその外港的な位置にあったことになる。そして、この湊浜地区を見渡せる丘陵縁辺に 6 世紀末～7 世紀前半に多数の横穴墓が造営されており、大代横穴墓群では頭椎大刀〔多賀城市教育委員会 1985〕が出土していることから、湊浜地区周辺にも拠点的な集落が存在した可能性を想定することができる。

### ③……………鳴瀬・江合・吉田川流域

これらの流域は、古代の黒川・志太・色麻・賀美・玉造・富田・長岡・新田・小田・牡鹿のいわゆる黒川以北十郡が置かれた地域である（図 4・5）。この地域では 6・7 世紀代の前方後円墳や有力古墳は未確認であるが、他地域との交流を通して古墳群や横穴墓群の造営が開始されたとみられる。古墳群や横穴墓の造営は他地域同様 7 世紀前半まで遡る可能性があるが、そのピークはこれまでみてきた①・②の地域と比べるとやや遅れて 7 世紀後半代とみられる。有力古墳がみられないことから傑出した在地有力氏族の存在は想定し難いが、大規模な古墳群や横穴墓群の存在を評価するならば、移民を含む他地域との交流により遅くとも 7 世紀前半には人身的支配体制が導入された地域とみることができる。

これら県北部諸郡の成立時期は、まず和銅六（713）年十二月に丹取郡が宮城県北部のいずれかの地に置かれ、その後、神亀五（728）年前後に丹取郡が玉造郡を含む数郡に分割され、黒川以北十郡が成立したとされる。「丹取」は現大崎市西部の「耳取」地区に関係する地名と推定され、神亀五年に軍団が所在する郡名が丹取から玉造に改められたことから、丹取郡が玉造郡を含む数郡に分割さ



れたと解釈されている。

しかし、考古学的な調査成果によると、大崎市名生館遺跡（玉造郡域）、東松島市赤井遺跡（牡鹿郡域）で、7世紀中葉まで遡る溝や柵などの区画施設を有する集落跡が発見されている。これらは、後の「山道」の中核となる玉造郡域の名生館官衙遺跡と、「海道」の中核となる牡鹿郡域の赤井遺跡にそれぞれ拠点集落がいち早く形成された状況を示している。さらに、7世紀末には大和町一里塚遺跡（黒川郡域）、大崎市南小林遺跡（富田郡域？）、同権現山・三輪田遺跡（長岡郡域）などでも同様の集落が出現し、和銅六（713）年の丹取郡建置以前に、すでに複数の小規模な郡域が成立していた可能性を示唆している。

さらに、こうした集落・城柵官衙の形成過程に大規模な群集墳や横穴墓群の分布状況を加えてみると（図4）、遅くとも7世紀末には後の「黒川以北十郡」にあたる領域が地域支配の単位として形



図4 鳴瀬・吉田川流域の小地域と主な遺跡の分布

成されていた状況を想定すべきである。その場合、丹取郡は、7 世紀末までに成立していた色麻・賀美・玉造・富田等の小規模な郡域を糾合して設置された 8 世紀初頭の一時的な広域郡とみるべきであろう。そうした場合、宮城県北部諸郡の成立時期とされる神亀五年の軍団名改称記事は、丹取郡が本来の小郡域に再分割された際、軍団が玉造郡に属していたことによるものと理解される。

宮城県北部を詳しくみていくと、南西の丘陵地に位置する黒川、志太の 2 つの郡域と、北西平野部に位置する色麻・賀美・玉造・富田郡域、北東平野部に位置する長岡・新田・小田・牡鹿郡域の大きく 4 地域に分けられる。そして、各領域の形成時期は、7 世紀後葉から末までの年代幅の中に納まると考えられる。以下、そうした視点から、県北部について、各郡域の内容を検討する。

**黒川：**黒川は、鳴瀬川水系吉田川流域の現大和町、大衡村、大郷町の地域にあたるとみられる（図 4）。この地域では有力古墳の存在を確認できないが、中規模の有力古墳として胴張型横穴式石室を内部主体とする大和町鳥屋八幡古墳（図 6-6）が確認されている。別所横穴などの横穴墓も確認されているが周辺地域に比べ、群集墳や横穴墓の造営は不活発な地域である。そうした中、同地域の大和町吉岡では、7 世紀末まで遡る溝や柵などの区画施設を有する一里塚遺跡が発見されている。一里塚遺跡は、黒川郡衙とこれに隣接するように形成された拠点集落とにより構成されている。明確な外来土器等は発見されていないが、遺跡の構成に大規模な計画性がみとめられ、成立段階に外部からの移民が関与した可能性が想定される。

**信太：**信太（志太）は、鳴瀬川中流域の現大崎市三本木、松山、鹿島台地域にあたると推定される（図 4）。この地域では有力古墳の存在を確認できないが、横穴墓は 6 世紀末から 7 世紀前半代に造営が開始され〔菊地 1993〕、大崎市山畑装飾横穴墓群をはじめ、青山・混内山横穴墓群、亀井岡横穴墓群、大迫（高岩・ハツ穴）横穴墓群などが造営されている。この地域では高岩・ハツ穴横穴墓群など、いわゆる肥後型横穴墓〔池上 1991〕や、関東に類例の求められる形態の横穴墓が多数造営されている〔古川 1996〕。この地域に分布する肥後型横穴墓は、大迫・ハツ穴横穴墓群に典型的にみられるように、妻入りで玄室三方向に「コ」字状に棺台を配する形態の横穴墓で、主に熊本県菊池川流域に分布する横穴墓と酷似する。また、同じ肥後型横穴墓である山畑装飾横穴の文様をみると珠文や同心円文などの配置に熊本県菊池川流域の装飾横穴に共通する文様構成・モチーフがみられる。これらのことから、志太地域の肥後型横穴墓や装飾横穴は、九州熊本県菊池川流域との直接的な交流によりもたらされたものと考えられる。肥後型横穴墓出土遺物として、亀井岡横穴墓群 16・17 号墓からは方頭大刀・馬具が出土している。

ところで、菊池川流域との交流とは具体的にどのような状況によるものであろうか。この問題に関して注目されるのは『続日本紀』慶雲四（707）年 5 月 26 日条の、白村江の戦（663 年）に参加し唐軍の捕虜となった陸奥国信太郡生王五百足の記事である。この記事によれば、陸奥国信太（志太）郡域の住民が朝鮮半島をめぐる軍事的緊張に際して徴兵され、7 世紀後半の朝鮮半島の軍事行動に参加したということになる〔熊谷 2007〕。菊池川流域の装飾横穴や肥後型横穴墓はこうした軍事的緊張の高まった情勢の下で九州地方との人事的な交流の中でもたらされた可能性が高い。しかも、肥後型横穴墓の交流からみえてくるのは、朝鮮半島の軍事行動との関係よりも、熊本県菊池川流域に設置された 7 世紀代の鞠智城との関係である。いずれにしても、宮城県北部において 660 年代初頭頃にはすでに信太郡域の祖形が成立し、7 世紀後半の陸奥国信太地域における人身支配が中央政

権の軍事行動に際して徴兵を可能にするほど強固な状況であったと考えられる。

**色麻・賀美・玉造：**これらの領域は、鳴瀬川上流域の現色麻町、加美町、大崎市岩出山、小野田、東大崎地域と推定され、後に「山道」と呼ばれた地域の北部にあたる（図4）。この地域でも、7世紀代の有力古墳は未確認であるが、7世紀初頭には群集墳・横穴墓群の造営が開始されたとみられる。その分布をみると、色麻町色麻古墳群（色麻）、加美町蝦夷塚・黒沢古墳群、米泉館山横穴墓群（賀美）、大崎市塚原・日光山古墳群・川北横穴墓群（玉造）などの高塚古墳群や横穴墓群が後の郡域単位にすでに分布する状況が明確である。こうした横穴墓群の分布状況から、これらの地域では、群集墳の造営がピークを迎えた7世紀中頃には後の色麻・玉造郡域を中核とした領域が形成されていた可能性を想定することができる。このうち、川北横穴墓群4号墓から銅碗が出土している。

一方、これら群集墳・横穴墓造営がピークを迎える7世紀中頃、この地域の中核的な集落跡として大崎市名生館官衙遺跡Ⅰ期の集落跡が形成される。この集落跡は多数の掘立柱建物で構成され、下野地域に類似した形態の関東系土師器が出土することなどから、移民による計画的な集落と考えられている〔高橋 2007〕。

その後、7世紀後半から末には、定型化した政庁をもたない城柵として名生館官衙遺跡Ⅱ期の施設が成立する。この段階で出土する関東系土師器は北武蔵の榛沢・幡羅郡域に類似した形態の土師器となり、移民の出自が変わるばかりでなく、その性格も柵戸としての性格を帯びたものに変化したとみられている〔高橋 2009〕。この地域で、7世紀後半代まで確実に遡る城柵官衙としては、玉造郡域に属する大崎市名生館遺跡Ⅱ期官衙が知られる。色麻・賀美郡域では7世紀後半代の拠点集落や城柵官衙は未確認であるが、色麻町一の関遺跡、加美町城生遺跡などで今後発見される可能性は残されている。上述したように、和銅六年の丹取郡建郡記事を、7世紀末までに成立したいくつかの郡域の統合を示す記事とみるならば、「丹取郡」に関わる「耳取」地区が、色麻、賀美、玉造郡域のほぼ中央にあたることから、この4郡域のいくつかは7世紀末には郡域として成立していて、丹取郡建郡の母体となったと推定される。遺跡の年代などからみても、和銅六年の建郡記事は7世紀末にこれら4郡域を丹取郡として統合されたことを示す記事とみるべきであろう。

**長岡・富田・新田・小田・牡鹿：**これらの領域は、江合（荒雄）川流域で、現大崎市宮沢、田尻、涌谷町、東松島市域と推定され、後に「海道」と呼ばれた地域にあたる（図5）。この地域でも、7世紀代の有力古墳は未確認であるが、横穴墓群は7世紀初頭には造営が開始されたとみられる。その分布をみると、朽木橋・小野横穴墓群（長岡・富田）、日向前・六月坂横穴墓群（新田）、追戸・中野横穴墓群（小田）、矢本横穴墓群（牡鹿）など、大規模な横穴墓群が後の郡域単位に分布している。このうち、朽木橋横穴墓群では南武蔵地方との交流を示す床面に敷石のある複室構造の横穴墓が、矢本横穴墓群では上総地方との交流を示す玄室と羨道との床に段差のあるいわゆる高壇式の横穴墓がそれぞれ複数確認されている。出土遺物をみると、矢本横穴墓群では49号墓から圭頭大刀、16・43・57・88号墓から馬具、28号墓では円文の線刻壁画、同29号墓では「大舎人」の墨書のある須恵器なども発見されている。「大舎人」墨書土器については「舎人」の刻書や、「春」の刻書のある須恵器〔矢本町教育委員会 1991〕が出土している東松島市赤井遺跡との関係が注目される。赤井遺跡Ⅰ期の集落跡の成立は矢本横穴墓の造営開始に前後する7世紀後半まで遡る。この集落跡は、矢本横穴墓群の形態や集落出土の関東系土師器の特徴、さらに住居跡カマドの特徴などから、関東地

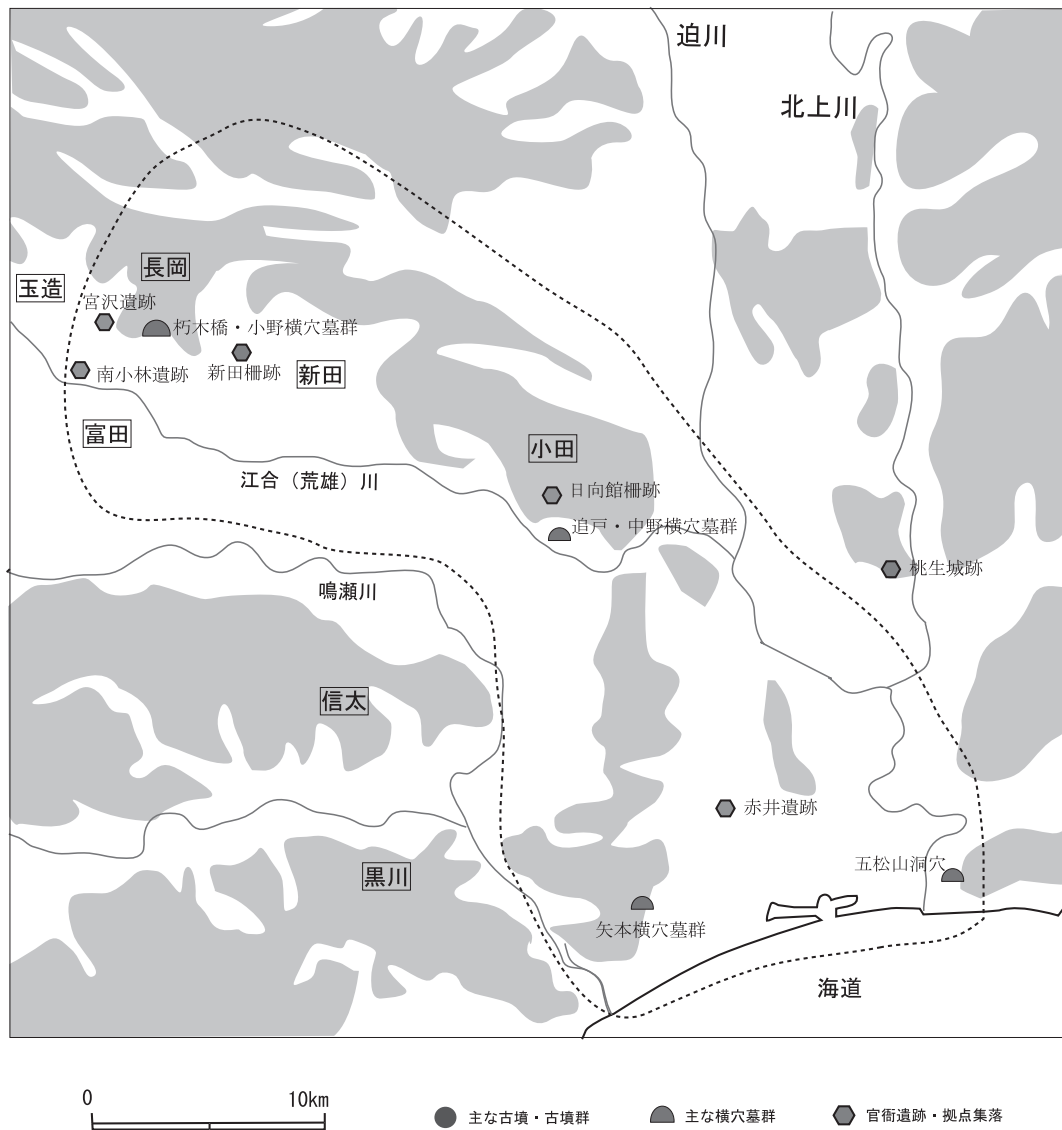


図5 江合(荒雄)川流域の小地域と主な遺跡の分布

方でも上総地方を故地とする移民系氏族集団を主とする集落と考えられている。そして、この移民系氏族集団の出自については、横穴墓の形態、関東系土器の系譜、「大舍人」墨書、「舍人」刻書、「春」刻書などの検討により、上総地方の伊弉屯倉の丸子氏や、春日部などの部姓氏族に帰属するとみられている〔熊谷1992, 平川1992, 佐藤2004〕。

以上のような状況から、赤井遺跡Ⅰ期の集落跡は、上総地方の屯倉を故地とする移民系氏族集団により形成され、その経営には、後の道嶋氏に連なる丸子氏や春日部氏などによって屯倉制・国造制的な人身支配の方式が導入されたと考えられる。したがって、赤井遺跡Ⅰ期は自然発生的な集落跡ではなく、7世紀後半にこの地方に計画的に創設された中核施設としての性格を有していたとみるべきであろう。



その後、7世紀末のこの地域の官衙的施設として、赤井遺跡Ⅱ-1期のほかに、長岡郡域に属す大崎市権現山・三輪田遺跡、富田郡域に属すとみられる大崎市南小林遺跡が成立する。さらに、新田郡に属する新田柵跡も7世紀末まで遡る可能性がある。小田郡では7世紀代の集落跡や官衙的施設は確認されていないが、涌谷町日向館跡で多賀城創建期の瓦が採取され、官衙の存在が推定されている。したがって、これら4郡域でも遅くとも7世紀末頃までには郡域の基礎が形成されていたと推定される。

## 小結

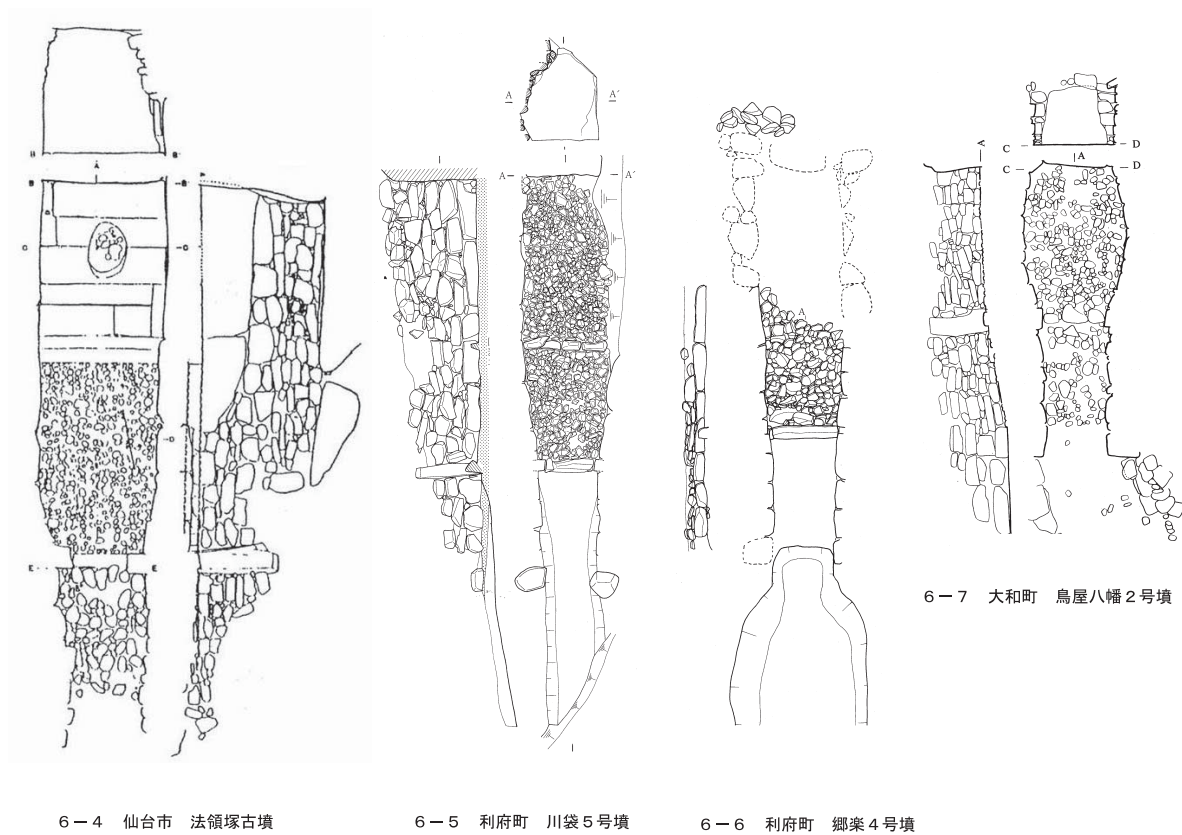
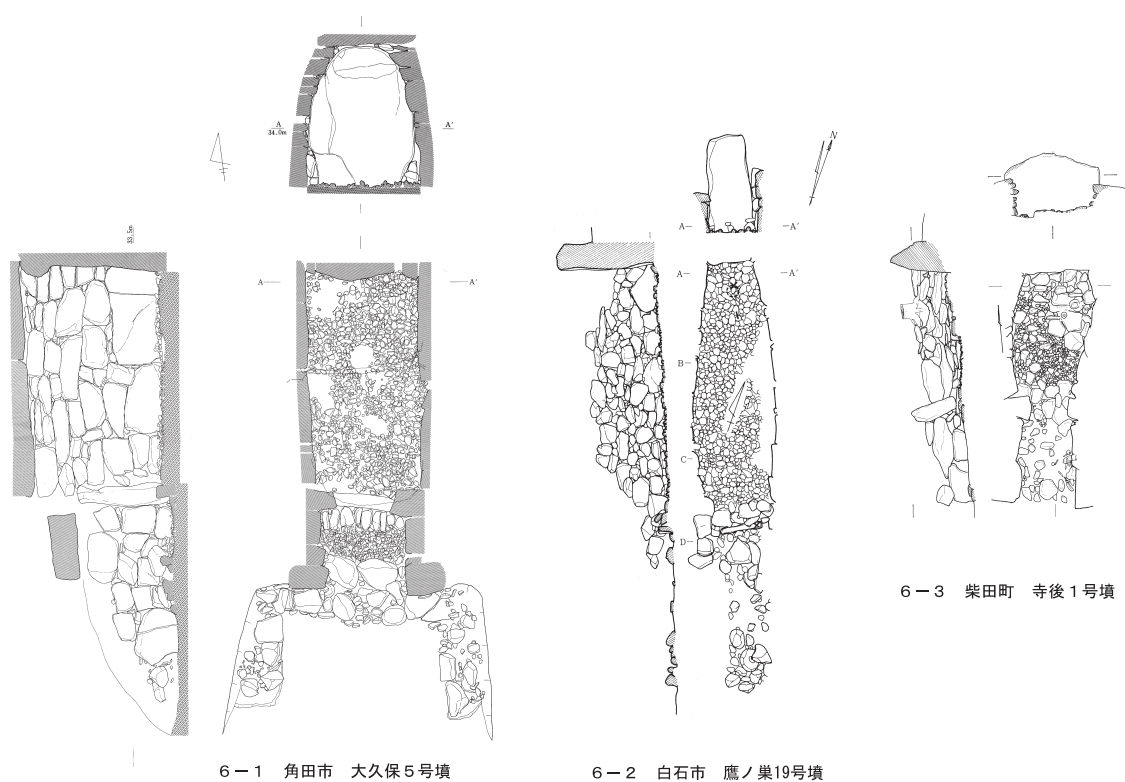
以上のような7世紀代の宮城県地域内の小地域の動向を検討すると三つの特徴的な様相が看取できる。この3点を確認して小結としたい。まず一つは、城柵官衙や囲郭集落などは、6・7世紀代の有力古墳が分布せず在地勢力の影響が希薄な地域に立地しているとみられることである。県南部の阿武隈川流域河口に近い亘理郡北部や、柴田郡船迫・蔵王町円田、宮城郡南部、さらに在地有力氏族の存在自体が希薄な宮城県北部一帯においてはそうした状況が顕著であるとみられる。二つには、こうした城柵官衙や囲郭集落などの形成段階に、関東地方の氏族が関与しており、その背景に関東・東北部地方の有力氏族の介在による移民や同族関係の締結などの行為があったとみられることである。三つには、城柵官衙や囲郭集落を核として、周辺の在地勢力を取り込む形で後の評・郡の領域が形成されたとみられることである。

これらの特徴は、律令国家の版図拡大というこれまでの当該地域の歴史観〔今泉 2005、岡田 2006、阿部 2007、熊谷 2009、村田 2009 ほか〕となんら矛盾するものではない。しかし、これらの諸特徴を中央政権側の視点からみるのか、あるいは関東・東北部地方の有力氏族の視点からみるのか、さらには在地勢力の側からみるのかによって、今までと異なった側面がみえてくる。地方行政単位の形成過程をより立体的に描き出すためには、今後はこうした多角的な視点が必要になると考えられる。

## まとめ

6世紀後半から7世紀前半にかけて、宮城県地域をはじめ東北地方南部にほぼ一斉に出現する区画施設を有する集落〔横須賀 2007〕、囲郭集落〔村田 2009〕や群集墳・横穴墓群の造営は、土器などの考古資料の比較検討により、関東以西諸地域からの移民を含む交流の中で実現したとみられている。一方、この時期、関東以西諸地域は、国造制・屯倉制・部民制といった人身的支配の下にあった〔仁藤 2009〕。こうした状況からすれば、囲郭集落の形成や群集墳・横穴墓群の造営に主導的役割を果たしたのは中央政権ではなく、旧来の人身的支配を温存する陸奥南部や関東地方の国造配下、もしくは屯倉・部民を管掌した伴造配下の部姓を帯びた有力氏族、と考えるのが妥当であろう。こうした有力氏族の残した遺構が7世紀前半代の外来土器が出土する囲郭集落や外来的要素をもつ群集墳・横穴墓群と考えられるのである。注意しておかなければならないのは、この時点では、領域支配の基盤となる城柵の設置や編戸は中央政権側でも志向していない、ということであろう。

ところが、7世紀後半には、在地有力氏族は擬制的同族集団として族制的編戸の対象となり〔岸 1973〕、さらに領域的支配を目指す中央政権によって設置された城柵官衙の支配下に入り領域的編戸



0 2m 4m

図6 宮城県地域の主な横穴式石室

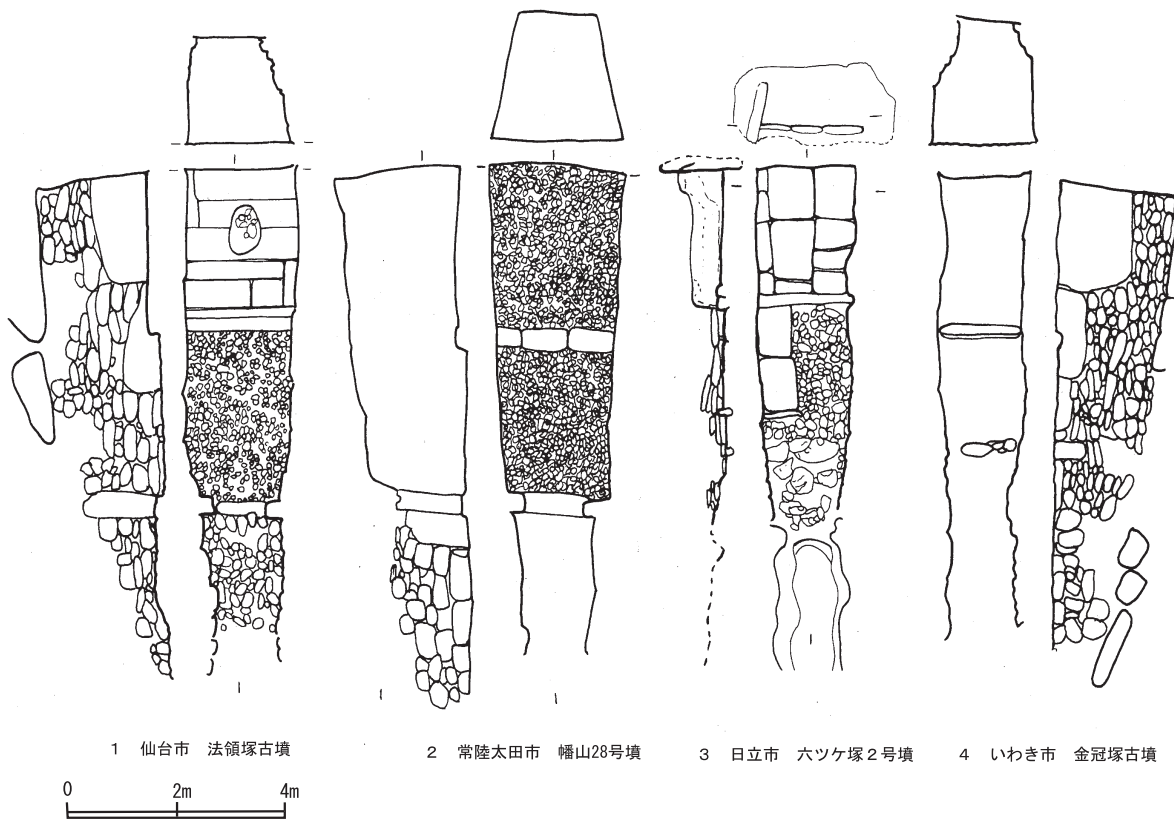
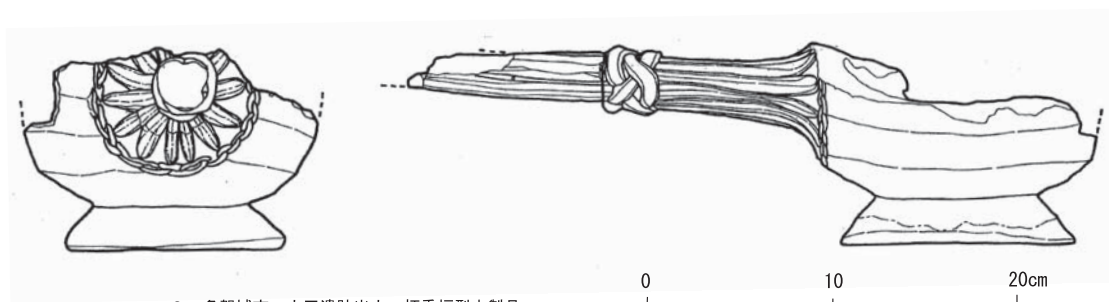


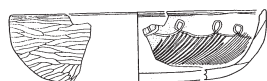
図7 法領塚古墳に類似した横穴式石室とその分布



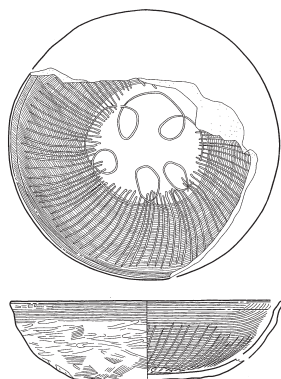
1 多賀城市 高崎遺跡出土 双龍環柄頭柄頭破片



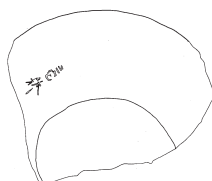
2 多賀城市 山王遺跡出土 柄香炉型木製品



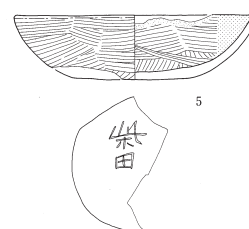
3 亶理町 堀の内遺跡出土 畿内系土器



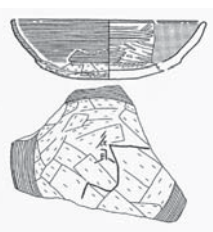
4 仙台市 郡山遺跡出土 畿内系土器



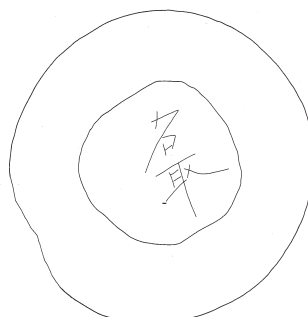
6 多賀城市 市川橋遺跡出土「三宅跡」刻書土器



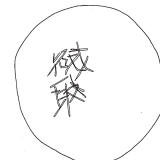
7 多賀城市 市川橋遺跡出土「柴田」刻書土器



5 仙台市 郡山遺跡出土 「名取」刻書土器



8 多賀城市 市川橋遺跡出土「名取」刻書土器



9 多賀城市 市川橋遺跡出土「名取」刻書土器

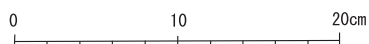


図8 多賀城市 高崎・山王・市川橋遺跡 出土遺物



の対象となっていたと考えられる。その起点となったのは、「白村江戦」前後の軍事的緊張に伴う人身支配の強化であり、宮城県北部地域でも「建評・建郡」による領域支配の前段階として、遅くとも「白村江戦」前後には人身支配の体制が確立していたと考えられる。

しかし、その一方で、7世紀後半代における城柵官衙の形成に関与した人々は、律令制施行以前の集団関係の中で生きていた。当時の地方支配方式は評里制にもとづく領域的支配とは本質的に異なり、とくに城柵官衙が設置された境界領域においては評里制導入の前提となる地方行政単位として、古墳時代以来の国造制・部民制・屯倉制等の人身支配方式の集団関係が色濃く残されていた。それが具体的な形として現われたものが7世紀後半代を中心に宮城県地域に爆発的に造営された群集墳・横穴墓群であったと考えられる。

## 註

(1)——当該前方後円墳についてはこれまで鷹巣20号墳として紹介されてきている〔岩見2001、藤沢2001ほか〕が、白石市教育委員会による鷹巣古墳群の最新の調査報告〔白石市教育委員会2012〕により古墳番号が変更された。このためここではこれに従い鷹巣17号墳として紹介した。

(2)——「国造本紀」で最北の国造とされる「思国造」を「日理国造」の誤記とみてこれにあてる見解もあるが、これをもって最北の国造とすることはできない。「思国

造」は、後にみるように、阿武隈川河口以北の7世紀前半代のいくつかの有力古墳被葬者のいずれかに比定されるべきで、「日理国造」は最北の国造ではないと考える。

(3)——仙台市北東部の宮城野区小田原・苦竹周辺には、千人塚古墳、善応寺横穴墓群、燕沢遺跡、大蓮寺窯跡など6～7世紀代の重要な遺跡が集中する地域がある。千人塚古墳は6・7世紀代の有力古墳である可能性もあるが市街地化の影響で実態は不明である。

## 参考文献

- 阿部 義平 2006「古代城柵の研究 (三)―城柵展開史と南北交流―」  
『国立歴史民俗博物館研究報告』第133集 PP. 1～49 国立歴史民俗博物館  
2007「古代城柵の研究 (四)―辺要宮城を巡って―」  
『国立歴史民俗博物館研究報告』第183集 国立歴史民俗博物館
- 荒木 隆 2011「陸奥南部の「海の道」―海道と海上交通路―」『福島考古』第52号 PP. 51～70 福島県考古学会
- 井上 辰雄 1999「蘇我の宗家と東国―房総地域の宗我部と屯倉経営―」『古代東国と常陸国風土記』 雄山閣出版
- 池上 悟 1991「東国横穴墓の型式と伝播」『おおいだ考古』第4集
- 岩見 和泰 2001「宮城県」『中期古墳から後期古墳へ』  
第6回東北・関東前方後円墳研究会発表要旨資料 PP. 171～192
- 今泉 隆雄 1999「2章 律令国家と蝦夷」『宮城県の歴史』PP. 29～73 山川出版社  
2005「古代国家と郡山遺跡」『郡山遺跡―総括編(1)―』  
仙台市文化財調査報告書第283集 PP. 284～318 仙台市教育委員会
- 大橋 泰夫 2009「国郡制と地方官衙の成立」『古代地方行政単位の成立と在地社会』PP. 25～58 奈良文化財研究所
- 大河原基典 2002「多賀城創建期における瓦生産の展開」『宮城考古学』第4号 PP. 73～97 宮城県考古学会
- 大平 聡 2010「城柵研究新段階の予感」『宮城考古学』第12号 PP. 86～90 宮城県考古学会
- 岡田 茂弘 2003「陸奥国府多賀城の建設」『東北歴史博物館研究紀要4』PP. 1～9 東北歴史博物館  
2006「三 城柵の設置」『古代を考える 多賀城と古代東北』PP. 85～119 古川弘文館
- 金子 拓男 1996「大化元年「越国奏上」についての検討」『越と古代の北陸』PP. 155～182 名著出版
- 菊地勝之助 1970『宮城県地名考』 宝文堂
- 菊池 佳子 1994「多賀城以前の陸奥国と須恵器」『歴史』第82叢
- 菊地 芳朗 1993「東北地方における横穴の出現年代」『福島県立博物館紀要』第7号 PP. 1～32 福島県立博物館

- 
- 2010『古墳時代史の展開と東北社会』 大阪大学出版会
- 岸 俊男 1973「日本における戸の源流」『日本古代籍帳の研究』 塙書房
- 日下 雅義 1991『古代景観の復元』 中央公論社
- 工藤 雅樹 1974「多賀城の創建とその諸前提」『日本考古学・古代史論集』 PP. 201～236 吉川弘文館
- 1998「多賀城の創建をめぐる一郡山遺跡第Ⅱ期官衙と名生館遺跡」『蝦夷と東北古代史』 吉川弘文館
- 熊谷・高野 1978「多賀城第Ⅱ期の刻印文字瓦」『研究紀要Ⅴ』 PP. 31～55 宮城県多賀城跡調査研究所
- 熊谷 公男 1992「道嶋氏の起源とその発展」『石巻の歴史』 第6巻特別史編 石巻市史編纂委員会
- 熊谷 公男 1992「10 古代東北の豪族」新版『古代の日本』 第9巻東北・北海道 PP. 261～288 角川書店
- 2004『古代の蝦夷と城柵』 歴史文化ライブラリー178 吉川弘文館
- 2007「第Ⅳ章 多賀城創建再考」
- 平成15～18年度 科学研究費補助金（基礎研究B）研究成果報告書 課題番号：15320111
- 『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』 PP. 418～442 東北学院大学文学部
- 2009「律令国家形成期における柵戸と関東系土師器」
- 『古代社会と地域間交流』 国士舘大学編 PP. 163～191 六一書房
- 桑原 滋郎 1992「8城柵を中心とする古代官衙」新版『古代の日本』 第9巻東北・北海道 PP. 201～230 角川書店
- 後藤 健一 2006「『天平12年遠江国浜名郡輪租帳』と湖西窯跡群」『陶磁器の社会史』 PP. 346～361 桂書房
- 小林 昌二 1996「越地域における部民分布の再検討」『越と古代の北陸』 PP. 57～82 名著出版
- 2005『高志の城柵』（新潟大学人文選書） 高志書院
- 坂井 秀弥 1996「水辺の古代官衙遺跡」『越と古代の北陸』 PP. 289～323 名著出版
- 佐川 正敏 2000「陸奥国の平城官式軒瓦 6282-6721の系譜と年代」『東北文化研究所紀要』 第32号 PP. 101～104
- 櫻井 友梓 2011「古墳時代終末期から多賀城創建前後の須恵器生産の展開」
- 『宮城考古学』 第13号 PP. 93～110 宮城県考古学会
- 佐藤 敏幸 2004「律令国家形成期の陸奥国牡鹿地方（2）—古代牡鹿地方の歴史動向—」
- 『宮城考古学』 第6号 PP. 139～158 宮城県考古学会
- 2006「東北地方における7世紀から8世紀前半の土器研究史—関東系土師器研究の現状と新たな研究視点の模索—」『宮城考古学』 第8号 PP. 123～144 宮城県考古学会
- 佐藤 敏幸・大久保弥生 2007「宮城県の湖西産須恵器」『宮城考古学』 第9号 PP. 111～134 宮城県考古学会
- 清水 みき 1983「湯舟坂2号墳出土環頭大刀の文献的考察」
- 『湯舟坂2号墳』 久美浜町文化財報告第7集 PP. 157～167
- 2006「四 賀城発掘」『古代を考える 多賀城と古代東北』 PP. 120～168 吉川弘文館
- 志間 泰治 1954「宮城県伊具郡金山台町古墳群調査概報」『歴史』 第7号 PP. 17～27
- 1961「宮城県伊具郡丸森町金山字台町古墳群調査概報第3叢」『東北考古学』 第2叢 PP. 32～38
- 進藤 秋輝 2010「古代東北統治の拠点 多賀城」シリーズ「遺跡を学ぶ」066 PP. 23 新泉社
- 菅原 祥夫 2004「東北古墳時代終末期の在地社会再編」『原始・古代日本の集落』 PP. 148～168 同成社
- 2007「第Ⅱ章 東北・北海道における6～8世紀の土器変遷と地域の相互関係 i～iv（福島県）」
- 平成15～18年度 科学研究費補助金（基礎研究B）研究成果報告書 課題番号：15320111
- 『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』 PP. 22～118 東北学院大学文学部
- 鈴木 雅 2010「十郎田遺跡の7世紀集落」『宮城考古学』 第12号 PP. 19～38 宮城県考古学会
- 鈴木 拓也 1998『古代東北の支配構造』 吉川弘文館
- 須田 勉 2007「前期多賀城の成立に関する試論」『考古学論究 小笠原好彦先生退任記念論集』
- 高野 芳宏 1991「田屋場横穴古墳」『多賀城市史』 4—考古資料— PP. 247～252 多賀城市
- 高橋 誠明 2007「律令国家の成立期における境界地帯と関東との一関係—宮城県大崎地方出土の関東系土師器と出土遺跡の意義—」
- 『国士舘考古学』 第3号 PP. 121～150 国士舘大学考古学会
- 2009「古代社会と地域間交流—土器からみた関東と東北の様相—」
- 『古代社会と地域間交流』 PP. 209～218 国士舘大学考古学会
- 田中 則和 1987「法領塚古墳鉄・銅製品整理報告」『仙台市博物館調査研究報告』 7 PP. 51～72
- 辻 秀人 1992「5 古墳の変遷と画期」新版『古代の日本』 第9巻東北・北海道 PP. 107～133 角川書店
- 辻 秀人 1984「宮城の横穴と須恵器」『宮城の研究』 1考古学編
- 1994「第1章陸奥 第2節陸奥南部」『前方後円墳集成 関東・東北編』 PP. 35～45 山川出版
-

- 
- 長島 榮一 2009『郡山遺跡―飛鳥時代の陸奥国府跡―』日本の遺跡 35 同成社  
 2011「陸奥国府の成立」季刊『古代文化』第63巻第3号 PP. 74～83
- 新納 泉 2001「空間分析からみた古墳時代社会の地域構造」『考古学研究』36巻1号 考古学研究会
- 仁藤 敦史 2007「「辛亥」銘鉄剣と「武蔵国造の乱」『季刊考古学別冊15』PP. 90～97 雄山閣  
 2009「六・七世紀の地域支配」『支配の古代史』PP. 77～105 学生社
- 沼澤 豊 2004「帆立貝式古墳築造企画論 8 小方部墳の被葬者」『季刊考古学』第87号 PP. 73～77 雄山閣出版  
 林部 均 2011「古代宮都と郡山遺跡・多賀城―古代宮都からみた地方官衙論序―」  
 『国立歴史民俗博物館研究報告』第163集 PP. 99～131 国立歴史民俗博物館
- 早野 浩二 2005「臨海の前時代集落―松崎遺跡の歴史的素描―」  
 『研究紀要』第6号 PP. 46～62 愛知県埋蔵文化財センター
- 芳賀 寿幸 1989「町内の遺跡」『柴田町史』通史編Ⅰ PP. 394～418  
 2004「古代柴田郡分割の謎を探る」『之波太』第31号 PP. 1～8 柴田町郷土研究会
- 平川 南 1992「9 律令支配の諸相」新版『古代の日本』第9巻東北・北海道 PP. 233～260 角川書店  
 1993「多賀城の創建年代―木簡の検討を中心として―」  
 『国立歴史民俗博物館研究報告』第50集 PP. 23～56 国立歴史民俗博物館  
 2004「中世都市鎌倉以前―東の海上ルートの実相―」  
 『国立歴史民俗博物館研究報告』第183集 PP. 253～281 国立歴史民俗博物館  
 2006「五 掘りだされた古代文字は語る」『古代を考える 多賀城と古代東北』PP. 176～216  
 吉川弘文館
- 平野 邦雄 1985『大化前代政治過程の研究』 吉川弘文館
- 広瀬 和雄 2009「古墳時代の国家フロンティア」  
 『古代学』第1号 PP. 1～17 奈良女子大学大学院学術研究センター  
 2012「6・7世紀の多摩川流域―武蔵地域の政治センターの形成―」『武蔵・相模の後期古墳』  
 東京・神奈川・埼玉埋蔵文化財関係財団普及連携事業公開セミナー 資料 PP. 22
- 福島 雅儀 1992「陸奥南部における古墳時代の終末」『国立歴史民俗博物館研究報告』第44集 PP. 517～600
- 藤沢 敦 1994「第1章陸奥 第1節陸奥中部」『前方後円墳集成 関東・東北編』PP. 35～45 山川出版  
 2001「阿武隈川下流域の前方後円墳（その2）」『宮城考古学』第3号 PP. 31～52 宮城県考古学会  
 2007「倭と蝦夷と律令国家―考古学的文化の変移と国家・民族の境界―」『史林』90巻1号 PP. 4～27
- 藤沢・菊地 2002「村田町中山岡横穴墓群の出土遺物」『宮城考古学』第4号 PP. 127～136 宮城県考古学会
- 古市 晃 2009『日本古代王権の支配論理』塙書房
- 古川 一明 1987「色麻古墳群の諸問題」『北奥古代文化』第18集 PP. 25～31  
 1996「北辺に分布する横穴墓について」『考古学と遺跡の保護―甘粕健先生退官記念論集―』  
 PP. 255～272 甘粕健先生退官記念論集刊行会
- 村田 晃一 2000「飛鳥・奈良時代の陸奥北辺―移民の時代―」『宮城考古学』第2号 PP. 45～80 宮城県考古学会  
 2009「律令国家形成期の陸奥北辺経営と坂東―在地土師器・関東系土師器器郭集落の検討から―」  
 『古代社会と地域間交流』国士舘大学編 PP. 141～162 六一書房  
 2010「陸奥・出羽における版図の拡大と城柵」  
 『条里制・古代都市研究』第25号 PP. 52～65 条里制・古代都市研究会
- 松本 秀明 1981「仙台平野の沖積層と後氷期における海岸線の変化」『地理学評論』54
- 松本・野中 2006「七北田川下流沖積地における完新世後期の潟湖埋積と自然堤防の形成」  
 『中野高柳遺跡Ⅳ』宮城県文化財調査報告書第204集 PP. 2～9 宮城県教育委員会
- 松崎 元樹 2007「後・終末期古墳の威信財」『季刊考古学別冊15』PP. 98～106 雄山閣
- 柳沼 賢治 2003「各地の終末期古墳 石城・石背」『季刊考古学』第82号 PP. 77～80 雄山閣出版
- 柳沢 和明 2009「多賀城市田屋場横穴墓群の再検討」  
 『東北歴史博物館研究紀要』第11号 PP. 13～42 東北歴史博物館  
 2010「多賀城市山王・市川橋遺跡における住社式～栗圀式期集落跡の様相」  
 『宮城考古学』第12号 PP. 59～85 宮城県考古学会
- 山中 敏史 1994『古代地方官衙遺跡の研究』 塙書房
- 横須賀倫達 2007「集落を囲む溝」『日中交流の考古学』PP. 191～208 同成社
-

吉野 武 2011「多賀城と城下の木簡」『木簡研究』第 33 号 PP. 238～252  
若月 義小 1987「安倍氏の航跡 東北経営と越」『明日香風 24』

木簡学会

## 報告書

- 大郷町教育委員会 1994 『大郷町鶴館遺跡』大郷町文化財調査報告書  
角田市教育委員会 1997 『大久保古墳群Ⅰ』角田市文化財調査報告書第 21 集  
角田市教育委員会 2008 『品濃遺跡』角田市文化財調査報告書第 32 集  
小牛田町教育委員会 1974 『山前遺跡』小牛田町文化財調査報告書  
蔵王町教育委員会 2005 『都遺跡ほか』蔵王町文化財調査報告書第 3 集  
白石市教育委員会 2012 『鷹巣古墳群』白石市文化財調査報告書第 42 集  
柴田町教育委員会 1976 『寺後古墳群』柴田町文化財調査報告書第 8 集  
色麻町教育委員会 1994 『日の出山窯跡群』色麻町文化財調査報告書第 1 集  
仙台市教育委員会 1976 『宗禅寺横穴発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第 9 集  
仙台市教育委員会 1976 『安久東遺跡発掘調査概報』仙台市文化財調査報告書第 10 集  
仙台市教育委員会 1981 『郡山遺跡Ⅰ—昭和 55 年度発掘調査概報—』仙台市文化財調査報告書第 29 集 PP. 28  
仙台市教育委員会 1985 『仙台市愛宕山装飾横穴発掘調査報告』仙台市文化財調査報告書第 85 集  
仙台市教育委員会 1994 『南小泉遺跡—第 22・23 次調査—』仙台市文化財調査報告書第 192 集  
仙台市教育委員会 2011 『法領塚古墳他』「法領塚古墳—第 2 次—」仙台市文化財調査報告書第 393 集  
多賀城市教育委員会 1985 『大代横穴古墳群発掘調査報告書』多賀城市文化財報告書第 7 集  
多賀城市教育委員会 2007 『高崎遺跡—第 56 次調査報告書—』多賀城市文化財報告書第 89 集  
多賀城市教育委員会 2008 『多賀城市内の遺跡Ⅰ』多賀城市文化財報告書第 90 集  
千葉県教育振興財団 2009 『武射郡衙跡—山武市嶋戸東遺跡総括報告書—』千葉県教育振興財団調査報告第 628 集  
築館町教育委員会 1992 『伊治城跡—第 18 次調査』築館町文化財調査報告書第 5 集  
宮城県教育委員会 1973 『山畑装飾横穴群発掘調査概報』宮城県文化財調査報告書第 32 集  
宮城県教育委員会 1981 『東北地建関連遺跡発掘調査報告書』PP. 1～40  
「上野山古墳群—山の上古墳—」宮城県文化財調査報告書第 76 集  
宮城県教育委員会 1986 『上谷横穴墓群』宮城県文化財調査報告書第 119 集  
宮城県教育委員会 1995 『大畑遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第 168 集  
宮城県教育委員会 1997 『山王遺跡Ⅱ—多賀前地区遺構編—』宮城県文化財調査報告書第 167 集  
宮城県教育委員会 1998 『山王遺跡Ⅲ—多賀前地区遺物編—』宮城県文化財調査報告書第 170 集  
宮城県教育委員会 1998 『山王遺跡Ⅳ—多賀前地区考察編—』宮城県文化財調査報告書第 171 集  
宮城県教育委員会 1997 『山王遺跡Ⅴ—八幡・伏石地区—』宮城県文化財調査報告書第 174 集  
宮城県教育委員会 2001a 『市川橋遺跡の調査』宮城県文化財調査報告書第 184 集  
宮城県教育委員会 2001b 『山王遺跡八幡地区の調査Ⅱ』宮城県文化財調査報告書第 186 集  
宮城県教育委員会 2009 『市川橋遺跡の調査』宮城県文化財調査報告書第 218 集  
宮城県多賀城跡調査研究所 1979 『多賀城漆紙文書』宮城県多賀城跡調査研究所資料Ⅰ  
宮城県多賀城跡調査研究所 1980 『多賀城跡 政庁跡 図録編』  
宮城県多賀城跡調査研究所 1982 『多賀城跡 政庁跡 本文編』  
宮城県多賀城跡調査研究所 1984 『多賀城跡調査研究所年報 1983』  
宮城県多賀城跡調査研究所 1994 『下伊場野窯跡』多賀城関連遺跡調査報告書 第 19 冊  
宮城県多賀城跡調査研究所 2007 『木戸窯跡群Ⅲ』多賀城関連遺跡調査報告書 第 32 冊  
宮城県多賀城跡調査研究所 2011 『日の出山窯跡群Ⅲ』多賀城関連遺跡調査報告書 第 36 冊  
宮城県多賀城跡調査研究所 2010 『多賀城跡 政庁跡 補遺編』  
矢本町教育委員会 1991 『小松遺跡・赤井遺跡』矢本町文化財調査報告書第 2 集  
亘理町教育委員会 1981 『桜小路横穴墓群』亘理町文化財調査報告書第 2 集  
亘理町教育委員会 1997 『堀の内遺跡』亘理町文化財調査報告書第 7 集



---

(宮城県多賀城跡調査研究所，国立歴史民俗博物館共同研究研究協力者)

(2012 年 9 月 26 日受付，2013 年 3 月 26 日審査終了)

## Formation Process of Local Administration Units in the Miyagi Prefecture Area

FURUKAWA Kazuaki

The Miyagi Prefecture in the Tohoku region of the Japan Islands is known as the northernmost area for sites of late Kofun period keyhole-shaped *kofun* (ancient burial mounds), collections of massed *kofun* with an internal main structure of horizontal stone chambers, and collections of massed tunnel *kofun*. In addition, in the same area a number of sites of *josaku kanga* (fortified administrative buildings) established in the late 7<sup>th</sup> century have been discovered; for example, the Koriyama site in Sendai City, the Myodate Kanga site in Osaki City, and the Akai site in Higashi-Matsushima City. For each small area, from the viewpoint of the relation between the central government and local areas, this paper examined the formation process of local administration units, which were the foundations of *josaku kanga* sites established in the late 7<sup>th</sup> century, especially by focusing on the process from the local viewpoint since the Kofun period, rather than from the traditional viewpoint of focusing on a government promoting the formation of a nation under the *ritsuryo* codes.

It can be considered that the system to govern local areas at that time was essentially different from the control of domains based on the county-village system, and particularly in the border areas where *josaku kanga* were established, group relationship under such people-based ruling systems as *kuni no miyatsuko*, *bemin*, and *miyake* since the Kofun period, remained strong. It is also possible to consider that this tendency was embodied specifically by the explosive construction of collections of massed *kofun* and tunnel *kofun* in the Miyagi Prefecture area mainly in the late 7<sup>th</sup> century.

The distribution of keyhole-shaped *kofun*, collections of massed *kofun* and tunnel *kofun* in the Miyagi Prefecture area was examined, and the following deduced: in the formation stage of *josaku kanga*, the central government selected those areas with weak local clans, and by sending immigrants from districts already ruled by the *miyake* system, they introduced into remote areas, a form of society and group relations similar to the *bemin* system or the *miyake* system. It can be thought that the central government involved local clans in the areas around *josaku kanga* in the development of the county-village system as the local administration unit.

Key words: Collections of massed *kofun*, collections of massed tunnel *kofun*, *josaku kanga*, local administration unit, *kuni no miyatsuko* system, *bemin* system, *miyake* system

---